

本論文は、中世修験道の歴史的動向と実態を地域社会のなかから検討するものである。

修験道は、山岳信仰に依拠した宗教体系であり、14 世紀の顕密寺院内部において確立し、その担い手である山伏は寺内下僧身分と考えられている。これらの山伏は、15 世紀には拠点とする地域を中心に相互に連携を持ち、聖護院門跡を棟梁として近世初期には宗教的に組織化する本山派修験道へと収斂する傾向がみられる。そのため、修験道研究は、本山派修験道や同時期にそれに対抗して組織化した当山派修験道の形成過程が中心的に扱われ、それをもって中世修験道を論じる傾向がある。本論文では、こうした組織化を志向する在地の山伏はもとより、本山派や当山派組織の枠外に位置づく山伏や宗教者を含めた総体を中世修験道として捉え、そこに関わった社会階層にも焦点をあてて、中世修験道の社会的意義とともにその歴史的展開を地域社会のなかから検討する。

一部「中世修験道の地域的基盤」では在地顕密寺院である摂津国豊島郡勝尾寺の事例から、寺院内の山伏の実態と寺院運営への影響を分析し、かつ寺院の経済的かつ宗教的存立基盤を追求することで、修験系寺院としての顕密寺院の地域社会における意義を明らかにした。

一章では、寺内で中世前期から確認できる寺僧による山林修行が 15 世紀の「山伏衆中」という山伏集団の形成を促したこと、また「山伏」という呼称が「山伏衆中」参加者を指す寺院内身分であることを指摘した。そして、こうした寺内山伏による熊野吉野修行によって特定坊舎と熊野御師を介した参詣システムが形成されていたことを論じた。

二章では、15 世紀以降に史料上に確認できる勝尾寺「寺領」の段階的な分析を行い、14 世紀の勝尾寺膝下地域の名主代レベルの在地住人の寺僧化と私領寄進が「寺領」形成の核となることを明らかにした。彼ら在地出身寺僧の寺内立身の手段が「修験之道」であり、「山伏」化して構築した「信仰圏」（第一部第一章・三章）と「寺領」所在地が重層性を持つことから、山伏活動が寺院経済に大きく影響を及ぼした可能性を指摘した。

三章では、15 世紀の勝尾寺の如法経供養の分析から、法会開催が寺院経済の補填策として機能したこと、その「信仰圏」が山伏による熊野信仰の廻壇を基盤として構築されたものであり、境内山林を日常的に用益する地域を包括したものであることを明らかにした。また、寺院運営を担う寺僧や坊舎が、熊野先達を担う修験系坊舎であることから、顕密寺院内において寺僧の下位と評価される山伏の位置づけを再検討した。そして、地域における寺院の意義として、勝尾寺の場合、境内膝下において生業を通じた対立要素を孕みながらも、住民の宗教的希求を満たす荘域を超えた地域的鎮守的意義を持つことを指摘した。

補論一では、中世修験道の担い手として、戦国期の本山派修験への「集団化」の周縁に位置した雑多な宗教者とその性格について、中世説話集を題材に検討した。

二部「中世修験道の展開」では、地域社会における修験道の社会的意義について、山岳斗藪修行の行場（宗教施設）である修験の「宿」の問題から検討した。

一章では、修験道の宗教施設「宿」の実態を検討した。修験の「宿」は、水分など開発の拠点に位置し、かつ修行に不可欠な物資や情報の集中する場であった。そこから、在地武士によって氏寺や城郭、荘園鎮守など交通の要衝に設定される点に注目し、中世的宿（都市的な場）との機能的な一致を明らかにした。また、そのために修験の「宿」の設定には、山伏の「便宜」とともに地域支配の理論が反映されたことを指摘した。

二章では、越前国丹生郡の顕密寺院である越知山大谷寺を事例として、地方山岳修験である「国峰」の実態を山内施設の維持管理の問題から考察した。「国峰」とは、16 世紀半ばの両嶺修行の妨げとして聖護院門跡が問題視した修行であり、各地域に形成された山岳霊場を指していると考えられる。越知山は、すでに 14 世紀には泰澄信仰を基盤に山岳霊場を形成し、15 世紀には内外の山伏を集める修行場となっているため、本章では、越知

山を「国峰」の一類型として論じている。そして、この越知山斗藪の必要物資や修行施設である「宿」の管理は、大谷寺周辺を生業の場とする地域住民に担われており、個別山岳霊場の修験活動が地域住民との合意によって支えられていたことを指摘した。

第三部「修験道の「集団化」と近世への展開」では、修験道の近世的変質を検討した。

一章および補論二では、『熊野那智大社文書』における旦那売券の分析から熊野参詣の「衰退」と評される背景を再検討した。熊野参詣の「衰退」という評価は、旦那売券の作成（旦那の売買）が15世紀後半にピークを迎え、以降減少するという数量的分析と、実際の参詣形態の変化によって指摘されている。参詣形態の変化については、本山派から山伏に補任される「職」の変化によって説明されており、戦国期には旦那を対象とした熊野参詣先達職から山伏を対象とした年行事職へ変化するもので、それは路次不通による熊野参詣の「衰退」が導く収益の減少に求められている。本章では、盛行期とされた15世紀後半の旦那売買形態の中心が本銭返であることから、それを未来の参詣を見込んだ投機的売買と考え、山内の御師が経済的に淘汰される時期であることを指摘した。そして、同時期は本山派による年行事職補任の初出時期でもあることから、「衰退」と評価された現象については、御師の没落と階層分化による旦那の拡散、各地霊場や「国峰」の形成による熊野参詣への求心力の低下と位置づけた。

二章では、信濃国佐久郡の本山修験配下の山伏集団の構造と機能を検討した。そこから、「職」の内実は、二所や富士など諸山兼帯が常態となっていたこと、山伏結合とは、集団内の山伏の持つ地域的「信仰圏」の総合体であること、在地の師壇関係は、山伏が修験を継続させるための相互補助機能であり、一族や各「信仰圏」のなかでそれが図れない場合、より広域な山伏集団へその保全が図られることを指摘した。

三章では、紀伊国加太荘刀禰公文の向氏の事例から、中近世移行期の山伏による修験の「家」の形成過程を論じた。向氏は、14世紀の荘開発を契機に伽陀寺（葛城修験）への関与を強め、中世後期以降、伽陀寺別当職を相伝して葛城修験一宿の管理を担い、葛城修験に関わる収益を得た。つまり、修験は向氏の「家産」構築に機能したといえるが、この「家産」の維持にあたり、向氏は、近世初頭の葛城修験の行場内の生業をめぐる相論を利用し、自らの修験の由緒を主張して一宿管理に関わる既得権益を追認させ、地域社会のなかで修験の「家」として成り立たせていくという実態を明らかにした。

以上、各章の検討内容の概略を示した。まず、近年の研究において、中世の修験道とは、顕密寺院内部から派生した宗教的組織として捉えられており、従来の民俗学的成果に基づく成果の多くを「修験道的なもの」として峻別する傾向が強い。しかし、説話集や狂言等に表現される山伏や宗教者の姿は、中世という時代における「修験道観」が表現されていると考える。本論では、中世修験道概念を、宗教的組織としての修験道（「狭義の修験道」）とその周縁に位置して修験活動を行う雑多な宗教者を包括した集団（「広義の修験道」）として捉え、中世社会における意義を検討した。

中世の在地では、山伏らの地域的連携が確認でき、組織化の前提となるが、本論では、この山伏集団とそれを擁する在地の顕密寺院を双方向的に捉えて論じた。結果、顕密寺院が地域寺院として機能するには、その構成員である山伏の出自が大きく影響しており、在地の名主・沙汰人・土豪クラスを中心とした山伏らは、地縁血縁を介して寺外の諸社会集団と関係性を保つことで、彼らは寺院経済を維持しえ、結果として寺社は荘域を超えた地域的鎮守として機能したといえる。また、修験の「宿」の事例からは、それが中世宿と同様の機能を果たしたことから、修験道が社会的意義をもって地域社会内に位置づいていたことを指摘した。中世修験道は、在地出身寺僧の立身の手段であったが、在地の活動においては、相伝の旦那に付随する利権の保持や、由緒の形成によって財の確保を果たす手段でもあり、出自を問わないという意味において、中世修験道は様々な宗教者によっても構成されていたと考える。しかし、近世の公権力による各宗教集団の統制と組織化への志向は、中世社会において「山伏」と認識されつつも、本山を通じた関係性を維持しえない周縁宗教者を排除し、近世的変容を遂げたといえる。今後は、こうした周縁の修験集団の実態とともに、中世修験道のさらなる実態分析を課題としていきたい。